

## 詩篇143篇

## ダビデの賛歌

《憐れみを求める祈り》

- 1 主よ。私の祈りを聞き、私の願いに耳を傾けてください。あなたの真実と義によって、私に教えてください。
- 2 あなたのしもべをさばきにかけてください。生ける者はだれひとり、あなたの前に義と認められないからです。

《追い詰められる詩人》

- 3 敵は私のたましいを追いつめ、私のいのちを地に打ち砕き、長く死んでいる者のように、私を暗い所に住ませたからです。
- 4 それゆえ、私の霊は私のうちで衰え果て、私の心は私のうちでこわばりました。

《神の御業の想起》

- 5 私は昔の日々を思い出し、あなたのなさったすべてのことに思いを巡らし、あなたの御手のわざを静かに考えています。
- 6 あなたに向かって、私は手を差し伸べ、私のたましいは、かわききった地のように、あなたを慕います。【セラ】

《寄木細工の祈り》

- 7 主よ。早く私に教えてください。私の霊は滅びてしまいます。どうか、御顔を私に隠さないでください。私が穴に下る者と等しくならないため。
- 8 朝にあなたの恵みを聞かせてください。私はあなたに信頼していますから。私に行くべき道を知らせてください。私のたましいはあなたを仰いでいますから。
- 9 主よ。私を敵から救い出してください。私はあなたの中に、身を隠します。
- 10 あなたのみこころを行うことを教えてください。あなたこそ私の神でありますから。あなたのいつくしみ深い霊が、平らな地に私を導いてくださるように。
- 11 主よ。あなたの御名のゆえに、私を生かし、あなたの義によって、私のたましいを苦しみから連れ出してください。
- 12 あなたの恵みによって、私の敵を滅ぼし、私のたましいに敵対するすべての者を消し去ってください。私はあなたのしもべですから。

八つのまとまりとなっている「ダビデ詩篇」は145篇まで続きますが、今回はその第六番目となります。詩篇全体の中では、七つの「悔い改めの詩篇」の最後の一つにも数えられます<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> 「悔い改めの詩篇」と呼ばれるものは、6篇、32篇、38篇、51篇、102篇、130篇、143篇

本篇を書いた詩人は、このとき何らかの病を身に負っていたのかもしれませんが。その苦しみが自分の罪の結果もたらされているものと考え、罪の赦しを祈り求めているようです。応報思想の影響があるのか、自覚的な罪と病とが何らかの関係を持っていたのか。いずれにせよ、詩人は深い苦しみの中にありました。

1節の中に「**あなたの真実と義によって、私に教えてください**」というフレーズがあります。「真実 (אֱמֻנָה／エムナー)」と「義 (צְדָקָה／ツェダーカー)」が組み合わせられるとき、祈る者に対して神が赦しを賜わることがイメージされます。神の義はただ罪を裁くものではなく、憐れみが含まれているのです。詩人はすべての人が義と認められるに値しないことを知っていました。「**生ける者はだれひとり、あなたの前に義と認められない**」(2節)という言い回しは、パウロの言及の元になっているかもしれません。

**なぜなら、律法を行うことによって、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。(ローマ3:20)**

3節に出てくる「敵」は、文脈で捉えると「敵対者」というよりも「病」を指すと読めそうです。「**たましいを追いつめ」「私のいのちを地に打ち砕き」「長く死んでいる者のように、私を暗い所に住まわせた**」と、絶望の淵を彷徨った詩人の状況をよく描いています。私たち人間はどのような経験によって絶望するのでしょうか。不治の病を宣告されたとき、大切な人を失ったとき、取り返しのつかない失敗をしたとき……。それぞれに経験してきたことは異なりますが、詩人の思いに自分の苦しかった日々を重ねて読むことができるでしょう。それこそが詩篇の「心」を読むということなのです。

5節で詩人は、イスラエルの民がエジプトの奴隷生活から贖われた日々を回顧しているのでしょう。如何なる苦境からも人を救い出すことのできる神が、自分の人生にも介入してくださるようにと。「**かわききった地**」(6節)という表現は、厳しい日照りによってひび割れた土地を連想させますが、詩人がもはや身も心も疲れ果てていたことと重なります。そこに恵みの雨が降り注ぐことを求めています。それは、癒されることです。

7～12節は内容的に「祈り」ではありますが、他の詩篇からの引用が多く、まるで寄木細工のようだとされます。以下の関連箇所を見てみると、詩人が頭の中に蓄えてきた聖句を紡ぎ出し、つなぎ合わせて、自分のことばとして祈りと替えていることが分かります。

7節……69:17、102:2、27:9、28:1

8節……25:2, 1, 4

10節……31:14以下、27:11

11節……25:22、119:40、142:7

私たちの祈りも御言葉に基づくものであることが大切です。自分の内から出る言葉である以上に、神のことばから来る祈りとなることを求めたい。

ここで詩人が神に求めている内容を取り出してみましよう。「早く私に教えてください」「御顔を私に隠さないでください」（7節）、「朝にあなたの恵みを聞かせてください」「私に行くべき道を知らせてください」（8節）、「私を敵から救い出してください」（9節）、「あなたのみこころを行うことを教えてください」（10節）、「私のたましいを苦しみから連れ出してください」（11節）、「私のたましいに敵対するすべての者を消し去ってください」（12節）。これらの願いから読み取れることは、ひたすら「敵」と呼ばれる存在から救い出されることです。詩人は神の御顔が見えなくなり、魂が苦しんでいました。神の御顔を仰ぎ見たい、自分が歩むべき道をはっきりと示していただきたい。人は神が見えなくなると、人生の方向性そのものを見失います。

神なしの人生とは、羅針盤なく大海原を彷徨い続けるようなものでしょう。では、人はどのようにして神という基準を人生に持つことができるのか。それは、聖書のことばを心に蓄えることです。自分の祈りのことばそのものとなるほどに、魂に染み込ませるように聖書を読むことです。詩人の祈りが聖句に満ちていることから考えると、彼は神の御顔が見えないようでありながら、尚も神と共に歩み続けていたと言えるでしょう。絶望の淵にあっても、心に蓄えられた神のことばは人を支え続けるのです。